

Title	改訂 近江國坂田郡志(郡教育會編, 西濃印刷會社出版部發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.21, No.1 (1942. 9) ,p.121- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

更に颯々たる松籟殷々たる晚鐘は當年と變りなく、こゝに立つて前庭の「七卿西竄紀念碑」を眺む時は、誰れか、西走當時の七卿の胸中に思を寄せ、維新志士の尊攘精神は愈々我等同胞の血脈中に流れ大東亞建設に邁進の原動力たるを痛感せざるを得ないであらう。(昭和十七年一月廿三日 武田勝藏)

改訂 近江國坂田郡志

(郡教育會編
西濃印刷會社出版部發行)

舊版坂田郡志三卷の上梓以來、既に二十餘年、其の間郷土史家の開拓に依り續々と遺蹟遺物古文書古記録の發見となり、數年前より皇紀二千六百年記念事業として、舊版の改訂の業着手せられ、茲に其の第一卷が上梓せられたのである。第一より第三までは、上古より現代に至る同郡各時代推移の概要を叙し、これに雜志を附し、第四五の兩卷は社寺の由緒と其の資料を載せ、第六七の兩卷は古文書古記録を収録することになつてゐる。

坂田郡は千古の碧波を湛へる琵琶湖の西北にあり、地勢自ら江州の要衝に當るが故に、古來史實史蹟を幾多殘してゐる。今、本書の總記によりそれ等を摘録せば、先づ朝鮮半島經營の範を垂れ給ひし神功皇后は本郡息長村名族息長宿禰王の女、敏達天皇の皇后息長廣媛は息長家の一族眞平王の女、其の山陵は大原村にあり、又圓融天皇を始め五朝の大嘗祭の悠紀齋田は本郡中に卜定せられしことなど、皇室との御縁故は多い。又交通の要衝なる爲め、壬申の亂に於ける兩軍の衝突はこの地邊に始まりしと云はれ、元弘の變の忠臣北畠具行は北條方に捕へられて關東に護送の途中相

原の清瀧寺にて斬られ、同じく捕へられた日野俊基も亦この街道を下り、太平記の美文中の東下りの段に、あらはれる番場醒ヶ井相原は何れも本郡の宿驛である。元弘三年上洛の足利高氏は官軍に歸順の旗を懸し、六波羅攻めとなり、北條時益同仲時の兩六波羅探題は東走し、本郡一向堂前に於て一族四百數十名力つき自害し、蓮華寺の和尚同阿は一同の姓名年齢並に辭世の歌を記録し冥福を祈りたる有名な過去帖は國寶となり、官軍の首將五辻宮守良親王の御事蹟と共に名高い。元龜元年織田信長が朝業の途上に淺井長政を亡ぼした姉川役の古戰場もあり、役後、豊臣秀吉は湖畔の長濱城に封ぜられ、居城中に兵燹にかゝりし社寺を復興し町民を愛撫し、仁澤偉大なるものは、今日に至りてもなほ其の徳を慕はれてゐる。戰國時代に本邦兵法に新面目を與へたる傳來の鐵砲の製造に名人を生んだ國友もある。古今貞婦の龜鑑とあがめらるゝ山内一豊の夫人若宮氏は飯村の産、淺井の家臣若宮喜助友興の女であり、又一豊も曾て長濱城の領主たりしこともあつた。秀吉に異才を見出されし石田三成は北郷里村石田の名家で、其の居城佐和山は郡界にある。徳川時代に入りて最初、佐和山に譜代の井伊氏を封じ京都に備へ、其の爲め本郡の大部分は永く彦根藩令の下にあり、其の保護に依り産業は發達し、生糸の製造、縮緬、蚊帳、天鷲絨の製織は今に盛にして、三百年間御用鐵砲師として威權を有せし國友の一族中には藤兵衛等の名人名工出輩してゐる。明治時代に入つて郡制ひかるゝや、長濱に郡役所を置き、後屢々町村の分合あつて、今日の長濱米原の兩町と柏原以下十七ヶ村に區劃せられ、皆な年を遂うて發展しつゝあるは、邦家の爲め慶祝

すべきである。

終に新版を世に紹介すると共に、舊版の編者中川家三翁の靈を敬弔し、新版の編纂主任中村林一氏並に澤直一、樋口元兩氏の公職の餘暇に拮据勵精し本志の完結に努力せし勞苦に深厚の敬意を表するのである。(昭和十六年十二月廿三日夜 武田勝藏)

ローマ文學史

(ワイト・ダッフ
岩崎良三譯)

さきにペトロロニウスの「トリマルキオーの饗宴」の譯文を上梓された長友、岩崎良三君は今般さらにダッフ教授の書を中心としてローマ文學一般に對する詳細な紹介を試みられた。相尋ぐ學績、その努力には洵に敬服する次第である。

本書はダッフ教授の「ローマ作家論」を中心に同氏の「ローマ文學史」及び「ローマ諷刺論」を参照しつつローマ文學一般に關する知識をまとめられたもので、文中に於ける原典引用は極めて豊富であり、岩崎君の説かれる如く、今日、ローマ文學の作品の本邦に翻譯紹介せられてゐるものがまことに僅少である點に鑑み、かかる絶好の入門書を得たことは吾人の深く喜びとするところである。

内容は所謂、ローマ文學の發祥から、キケロー、カエサルの時代を経て、アウグストゥス時代に及び、更に帝政銀時代の詩歌、散文を論じて餘すところがない。なほ附録として「ウエヌスの宵祭」が譯出されてゐる。

今日、本邦學界に於て盛んに新しき世界史觀が叫ばれ、吾人は

この新時代の建設を前にして嚴正なる意味で西歐文化の再檢討を試みねばならぬ地位にあり、その批判が西歐文化の源泉たるギリシア、ローマの古典文化に對する理解なくしては不可能であることを思へば、今日かかる出版を見たことが誠に意義深きものであることを痛感せざるを得ぬ。

ただ慾を言へば此の書は「史」と言ふには餘りにも脈絡がない。つらぬいて流れてゐるものが無い。其處には時代もミリュエも描かれてゐない。各作家が順々に手際よく紹介されてゐるだけである。従つてこの書には「ローマ文學入門」と名をつけた方が一層よくその内容を傳へ得たことであらうと思ふ(青木書店發行) (昭十七・七・十二、近山金次)。